

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：34519

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K11942

研究課題名（和文）看護学生から新人看護師への移行を支援する統合看護実習教育の検討

研究課題名（英文）A Study of Integrated Nursing Clinical Practicum Education to Support the Transition from Nursing Student to New Nurse Practitioner.

研究代表者

三谷 理恵 (Mitani, Rie)

兵庫医科大学・看護学部・講師

研究者番号：70437440

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、看護学生から新人看護師への移行を支援する効果的な看護学実習教育を検討するために、現在実施されている統合看護実習（以下統合実習）の運営実態調査及び看護学生から新人看護師への移行を経験した対象者への面接調査を実施した。統合実習は教育課程により多様な実習形態が存在しており、教育課程（3年制・4年制）別の比較からそれぞれの目標設定や教員が認識する学びの特徴が明らかとなった。看護学生は統合実習での学びを日々の新人看護師の実践に活用できる要素も多くあるものの、新人看護師の移行期に直接活用しきれない要素も示された。さらに、本実習のキャリア教育としての意義も示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

全国の看護師等養成所における運営実態と共に教育課程別の比較を行うことでそれぞれの特徴を明らかにすることができた。また、これまで単一教育機関での学生の学びを捉えた研究はなされてきたが、複数の教育機関を対象に看護学生の学びとともに新人看護師にとっての本実習の意義を明らかにすることができた。これらの成果は、今後看護学生から新人看護師への移行支援を含めた統合実習教育を検討する際の基礎的資料を提供することができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to identify the features of an effective nursing practice education that supports the transition from nursing student to new nurse. For this purpose we conducted a survey of the actual processes of integrated nursing practice currently being implemented and an interview-based survey of candidates who have experienced the transition from nursing students to new nurses. Various forms of integrated practice existed in different educational programs. Comparison by educational program (3-year or 4-year) revealed the characteristics of each with respect to goal setting and the learning perceived by teachers. Although there were many elements that could be applied to the daily practice of new nurses, there were also elements that could not be directly applied to their transition period. Furthermore, the significance of this practice for career education was also suggested.

研究分野：基礎看護学

キーワード：統合看護実習 移行期支援 看護学生 新人看護師 看護の統合と実践

1. 研究開始当初の背景

保健師助産師看護師学校養成所指定規則第4次改正において、統合分野が設置され、「看護の統合と実践」実習(2単位)(以下、統合実習とする)の運用が開始されている。この実習は、学生が、卒業後臨床現場にスムーズに適応するために、医療現場の現実を理解することを目的の一つとしている(厚生労働省,2007)。すなわち、看護学生には、看護技術や知識を獲得すると同時に、実際の看護チームの中に入り看護実践現場に適応していく力量の育成が同時に求められており、この中核を担う「統合実習」は、看護学生から新人看護師への移行を支援するための重要な学習機会と考えられる。統合実習で、どのような目的を設定し実習内容を構成するのは看護基礎教育機関に委ねられており、多様な実習形態が存在していたが、その実態は明らかではなかった。また、看護学生から、新人看護師への移行において、統合実習での体験が新人への移行期の看護実践活動にどのように影響するのかを検討出来ておらず、現状の調査は学生の学びの明確化に留まっており、移行支援という視点から統合実習教育の効果を検討する段階に至っていないと考えられた。

そこで、本研究は、看護基礎教育卒業前の看護学生から新人看護師への移行を支援する効果的な看護学実習教育を検討するために、現在実施されている統合実習の実態を明らかにすること、看護学生から新人看護師への移行を支援する効果的な統合実習を検討することを目指した。

2. 研究の目的

統合実習がどのような目標のもとに、どのように実施されているかその運営実態及び看護教員の本実習に対する認識を明らかにする。

統合実習を受講した看護学生が捉えた学びとその意義を明らかにする。

統合実習は新人看護師の実践にどのように影響したのかを明らかにする。

3. 研究の方法

1) 第1段階調査

目的を達成するため、全国の看護師養成機関から無作為に選出した198校818名の看護教員を対象に、無記名自記式調査(郵送法)を実施した。調査期間は2017年1月~3月に行った。調査項目は、統合実習の目標26項目、実習方法4項目を設定した。加えて、看護教員が認識した統合実習における学生の学び・意義16項目、統合実習における課題11項目を設定した。いずれも、「とてもそう思う」~「全く思わない」の4段階リッカートと「わからない」の選択肢を設定した。基本統計量を算出するとともに、教育課程別(3年制または4年制)での比較を行った。

2) 第2段階調査

目的を達成するため、看護系大学に所属し、統合実習を受講した看護学生を対象に面接調査を実施した。また、研究対象者となった看護学生が翌年新人看護師となった時期に、自分の看護実践に統合実習体験がどのように影響しているのかを明らかにするため、再度面接調査を実施し質的記述的に分析した。

4. 研究成果

1) 第1段階調査

調査回答者は看護教員194名(回収率23.7%)であり、有効回答数は186名(有効回答率95.9%)であった。所属教育機関は、教育年限3年の教育課程(以下、3年制課程)は121名、4年の教育課程(以下、4年制課程)65名であった。

(1) 統合実習の目標設定と看護教員が認識した統合実習における学生の学び・意義

統合実習でどのような目標設定がなされているかを調査した。統合実習は、看護学分野別に実施されることが多いが、分野別目標のみの回答は8名(3年制3名、4年制5名)、共通目標のみへの回答は100名(3年制75名、4年制25名)、両方への回答は78名(3年制43名、4年制35名)であった。共通目標として回答が多かった上位5項目を表1に示す。回答が最も少ない目標は「19.災害時における看護職の役割を理解する」16.1%であった。共通目標をみると、教育課程に関わらず多くの教育機関で、専門職チームあるいは看護チームの一員として他者と協働しながら看護職の役割を実践的に理解することが目指されていることが明らかとなった。さらに既習学習内容を踏まえ、自己の課題の明確化や看護観の醸成により、看護学での学びの統合を図ることが目指されていると考えられた。

教育課程別に比較し有意差があった項目を表2に示す。これらは優先順位の判断や多重課題への対応等、日常の看護師の実践活動に近づくための実践的目標であり、3年制課程のほうが回答割合は高い傾向にあることが示された。

看護教員が認識した統合実習での学び・意義の構造を把握するため、探索的因子分析を行

った。結果、第1因子「看護チームの一員として実践する視点を学ぶ機会」、第2因子「看護職としての将来像を描く」、第3因子「組織的な看護活動への理解が深まる」、第4因子「連携・協働的な看護活動への理解が深まる」の4因子構造が明らかとなった(表3)。さらに、因子得点を教育課程別で比較した結果、第1因子は3年制課程が4年制課程よりも高く、第4因子は、4年制課程が3年制課程より高く、有意差を認めた。これらの結果から、3年制課程は学生が卒業後、スムーズに看護実践現場に移行することを志向した実習、4年制課程では、継続看護やチームでの連携を志向した実習により重点が置かれる傾向があることが推察された。また、本調査では、第2因子「看護職としての将来像を描く」という視点が明らかになった点が興味深い。看護師への移行直後支援だけでなく、看護師としての中長期的なキャリア支援にどのような影響があるのかについても今後検討すべき課題であると考えられた。

表1 統合実習の目標設定の有無(共通目標への回答上位5項目を抜粋)

質問項目		共通目標への回答							
		全体 n=178		3年制課程 n=118		4年制課程 n=60		p	
		n	%	n	%	n	%		
1	既習の学習体験を踏まえ、自己の課題を明確に することができる	あり なし	143 35	80.3 19.7	91 27	77.1 22.9	52 8	86.7 13.3	0.130
26	医療チームの一員として責任のある行動をとる 事ができる	あり なし	132 46	74.2 25.8	95 23	80.5 19.5	37 23	61.7 38.3	0.007
12	看護チームの一員として、チーム活動の中で看 護を展開することができる	あり なし	128 50	71.9 28.1	91 27	77.1 22.9	37 23	61.7 38.3	0.030
4	自己の看護に対する考えを深め、看護観を持つ ことができる	あり なし	127 51	71.3 28.7	84 34	71.2 28.8	43 17	71.7 28.3	0.947
17	保健・医療・福祉チームでの協働における看護 の役割と機能を理解できる	あり なし	125 53	70.2 29.8	80 38	67.8 32.2	45 15	75.0 25.0	0.320

表2 統合実習の目標設定の有無(教育課程別で有意差があった項目のみ抜粋)

質問項目		共通目標への回答							
		全体 n=178		3年制課程 n=118		4年制課程 n=60		p	
		n	%	n	%	n	%		
8	複数名の患者を受け持ち、優先順位を踏まえて 看護を展開できる	あり なし	105 73	59.0 41.0	79 39	66.9 33.1	26 34	43.3 56.7	0.002
9	多重課題に対応し、看護を展開することができ る	あり なし	88 90	49.4 50.6	68 50	57.6 42.4	20 40	33.3 66.7	0.002
10	限られた時間内で効率的に看護を展開すること ができる	あり なし	76 102	42.7 57.3	63 55	53.4 46.6	13 47	21.7 78.3	0.000
11	夜勤帯・早朝など含めて24時間継続する看護の 展開を理解することが出来る	あり なし	64 114	36.0 64.0	50 68	42.4 57.6	14 46	23.3 76.7	0.012
12	看護チームの一員として、チーム活動の中で看 護を展開することができる	あり なし	128 50	71.9 28.1	91 27	77.1 22.9	37 23	61.7 38.3	0.030
22	看護師長が行う看護管理の実際を理解すること ができる	あり なし	98 80	55.1 44.9	74 44	62.7 37.3	24 36	40.0 60.0	0.004
23	看護チーム内のリーダーの役割を理解すること ができる	あり なし	108 70	60.7 39.3	78 40	66.1 33.9	30 30	50.0 50.0	0.038
24	看護チーム内におけるメンバーの役割を理解す ることができる	あり なし	122 56	68.5 31.5	87 31	73.7 26.3	35 25	58.3 41.7	0.037
26	医療チームの一員として責任のある行動をとる 事ができる	あり なし	132 46	74.2 25.8	95 23	80.5 19.5	37 23	61.7 38.3	0.007

二乗検定

表3 統合実習の学び・意義の構造

因子名	質問項目
【第1因子】 看護チームの一員として実践する視点を学ぶ	臨床現場で求められる時間管理の視点が理解できる
	臨床現場で求められる優先順位の判断が理解できる
	看護チームの中でメンバーとして他者と連携して活動するための視点が得られる
	看護チームにおけるリーダーシップ・メンバーシップに対する理解が深まる
【第2因子】 看護職としての将来像を描く	日勤帯から夜勤帯へと24時間継続する看護を展開するための視点が理解できる
	就業後の看護師としての自分の活動を具体的にイメージできる
	看護師になる者として、自己を振り返ることができる
	看護師に必要な責任を自覚できる
【第3因子】 組織的な看護活動への理解が深まる	自分の目指す看護師像・キャリアの方向性が明確になる
	臨床現場で現実求められる看護実践を具体的にイメージできる
	災害看護の理解が深まる
【第4因子】 連携・協働的な看護活動への理解が深まる	医療安全・リスクマネジメントの理解が深まる
	組織における看護管理の理解が深まる
【第4因子】 連携・協働的な看護活動への理解が深まる	看護職以外の他職種との連携への理解が深まる
	病院・地域との継続看護の理解が深まる

(2) 統合実習の実習場所・実習方法 (複数回答あり)

統合実習の実習場所は病棟(94.1%)が最も多かったが、医療機関以外でも、訪問看護ステーションや保健所・保健センター、学校など様々な場が示された。具体的な実習方法で回答が最も多かったのは、日勤帯すべての勤務の体験(80.1%)であった。指導体制では、「教員が1日1回以上巡回指導を行う」(50.5%)が最も多く、「教員が終日直接指導する」は36.6%にとどまった。これらの結果から、統合実習は看護教員よりも看護実践現場の指導者からの指導体制で進められている傾向が示唆された。

(3) 看護教員が認識する統合実習における課題

設定した11項目の内、回答者の半数以上が課題と認識した項目はなかった。調査時点で指定規則改正後8年が経過しており、すでに各教育機関と医療機関で統合実習における教育について吟味が重ねられて課題解決が図られている可能性が示唆された。ただし、課題がなくなったわけではなく、4年制課程では、教育機関内の目標共有、3年制課程では、実習施設との実習目的の共有の困難さを示す傾向も見られた。統合実習での指導体制は、先に示した通り、教員の巡回指導が多く実習機関との目標共有は実習目標達成のためにも不可欠であり、今後学生の効果的な学習につながる実習環境調整、教育機関と実習期間の連携は重要課題であると考えられた。

2) 第2段階調査

(1) 統合実習における学生の経験の明確化

第2段階調査は、2017年度統合実習を履修した3つの看護系大学に所属する看護学生を対象とした。面接調査に協力した学生は10名であった。体験した実習内容は多様であり、複数患者の受け持ちを中心課題とした実習や看護師への随行実習など病棟における職業志向型の実習を体験した学生が6名、来来自分が実践したいあるいは関心が高い領域を選択するキャリア志向型の実習を体験した学生が4名であった。いずれの学生も、統合実習では2つ以上のねらいをもって取り組む実習であったことを説明していた。具体的には、看護管理者への随行実習と複数患者の受け持ち実習が組み合わせられる等である。

統合実習での学びでは、看護チームで連携して看護を提供する姿勢や、多忙な中でも患者を優先し看護を実践していく大切さ、患者の退院後の生活まで見通して看護をしていく必要性など、これまでの実践体験を深化させる視点が語られた。また、退院支援の現実の難しさや調整の実際を看護師の実践を通して理解しており、分野別実習では体験し得なかった難渋事例の現実に直面する様子がうかがえた。さらに、他部門・多職種との具体的な連携方法や、看護組織におけるマネジメントレベルの違いの理解を得ていた。これらは、第1段階調査で明らかになった、看護教員が学びとして認識している項目と合致しているといえる。さらに、看護学生の語りから、統合実習は、看護チームでの連携や多職種との連携・協働の実際と共に、自分のめざす看護を明確にする機会としても受けとめられていた。さらに、自身のキャリア形成という視点からも看護職としての様々な働き方を知る機会となっており、概ね教員の認識する学び・意義と看護学生が捉えた学び・意義は一致していると言えよう。最終学年に開講されている本実習では、看護学分野別実習において受け持ち患者への看護中心の志向性から、看護実践を実現するシステムなど看護実践を俯瞰的に捉える視点を持つ機会であり、自分だけの実践ではなく看護チームの中、あるいは看護組織の中での自分を意識する機会としても重要である点が

推察された。さらに、看護学生が捉えた意義の中には、就職を直前に控え、分野別実習以上に、看護師の実践の在り様を理解しようとする姿勢をもつとともに、新人看護師の姿を1年後の自分と見立てて具体的な実践現場でのサポート体制を理解する機会としていることが推察され、これらの体験は、看護師になる前段階として重要な意味を持つ可能性が高い。

(2) 新人看護師が認識する統合実習の意味

2017年度に調査協力が得られた10名の内、2018年に医療機関に就職した新人看護師5名より調査協力が得られた。調査は、2018年9月～2019年1月にかけて実施した。この調査では、看護学生時代の学びとして語られた内容をベースとしながら、現在の新人看護師自身の実践を語ってもらい、統合実習の学びや体験が現在の看護実践にどのように影響があったのかを明らかにした。参加協力が得られた5名の内、1名は統合実習の実習病棟に就職していた。その他4名は、統合実習では在宅や国際看護分野などを選択しており、学生時代の実習施設と就職した医療機関が異なっていた。

統合実習での体験や学びが新人看護師の現在の実践にどのように影響したのかを検討した結果、学生時代の統合実習での学び・体験を活かし、新人看護師は看護チームの一員として働いていく姿勢をもって実践に取り組んでいる様子が語られた。例えば新人看護師は、看護チームの中での自分の役割を踏まえた活動を意識しており、自分の力量の限界を見極めながら先輩への相談・調整を行うなどが挙げられた。また、在宅療養の場を統合実習で体験した新人看護師は、退院後の療養生活を考える視点が備わっていることを自覚しており、退院後も続く患者の療養生活を意識した看護の提供を展開している様子が語られていた。さらに多様な看護活動の場の体験を経て描く将来像では、新人看護師として日々の実践に邁進しつつも、統合実習の体験を糧に自分の数年後の将来を見据えたキャリア形成を進める様子もうかがえた。

一方、統合実習での体験を活かしきれない思いも見出された。具体的には、看護師長の随行体験や、複数受け持ちの見学体験を就職直後の実践への活用、リーダー看護師の意図を理解しても今の自身の実践には活かせない思いや、治療援助の実践を就職後に活かすことの難しさとして語られた。いずれも実習での良い学びとして受け止めているものの、新人看護師として就職6～10か月の時期においては直接日々の実践にどのように影響しているかを説明しがたい状況があることが推察された。

3) 総合考察及び今後の展望

本課題は、統合実習の運営実態と教員の認識を明らかにするとともに、看護学生が自分の学びをどのように受けとめ、新人看護師の実践に活用しているかを検討してきた。これまで不明瞭であった統合実習の運営実態および教育課程別の特徴を示したことは、今後のカリキュラムを考える上で重要な基礎的材料を提供できたと考える。また、複数の教育機関に所属する看護学生から新人看護師時代にかけて前向きに面接調査を実施し、看護学生時代の学びがどのように活用されているのかを明らかにした点も重要である。とりわけ、これまで医療機関への就職を前提とした職業志向型実習の卒業後の効果を明らかにした研究はこれまで散見されたが、就職先とは全く異なる分野を選択した学生であってもその体験を日々の看護実践に活用している点も興味深い。単に、自分のキャリアの選択肢を広げるだけでなく、多様な場で展開される看護に触れ、分野別実習では体験出来ていなかった看護師および多職種との連携・協働を現実的に体感したことが、学びをもたらし、新人看護師としての看護実践に活用されている様子が窺えた。さらに今後、看護師としてのキャリアを重ねる中でどのような意味があるのか探求する必要があると考える。

本課題は第1段階及び第2段階調査の結果を踏まえ新人看護師を対象にした追加調査を2020年度に計画していた。しかし、2020年2月新型コロナウイルス感染症のまん延により、従来の統合実習教育はオンライン実習などの手法の変更を余儀なくされ、医療機関での実習が困難な状況が全国的に継続した。また医療現場においても新型コロナウイルス感染症への対応から新人看護師への教育手法や移行支援の変更も生じており、コロナ禍以前の調査結果との比較調査は断念せざるを得ないと判断した。そのため、看護学生から新人看護師への面接調査の結果から、新人看護師にとっての統合実習の学びの影響を検討するにとどまっている。第1段階調査で明らかになった通り、統合実習は多様な実習形態が存在するがゆえに、受けた看護学生の学びも多様であると推察する。これらがどのように新人看護師として、さらに中・長期的な看護師としてのキャリアに影響するのかについては今後の検討課題である。

文献

厚生労働省(2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. 最終確認 2023年6月6日.

<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 三谷理恵, 關戸啓子, 澁谷幸, 香川秀太	4. 巻 24
2. 論文標題 統合実習に対する看護教員の認識と運営実態 教育課程別の比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸市看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 41 - 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 關戸啓子, 三谷理恵, 澁谷幸
2. 発表標題 統合看護実習教育における実態調査 (第3報) - 担当教員が捉える教育効果 -
3. 学会等名 日本看護学教育学会第29回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三谷理恵, 關戸啓子, 澁谷幸
2. 発表標題 統合看護実習教育における実態調査 (第4報) - 担当教員が捉える統合看護実習での課題
3. 学会等名 日本看護学教育学会第29回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三谷理恵, 關戸啓子, 澁谷幸, 香川秀太
2. 発表標題 統合看護実習教育に関する実態調査 (第1報) 統合看護実習の実習目標について
3. 学会等名 第29回日本医学看護学教育学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 關戸啓子、三谷理恵、澁谷幸、香川秀太
2. 発表標題 統合看護実習教育に関する実態調査（第2報）統合看護実習の実習方法について
3. 学会等名 第29回日本医学看護学教育学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	澁谷 幸 (Shibutani Miyuki) (40379459)	神戸市看護大学・看護学部・教授 (24505)	
研究分担者	關戸 啓子 (Sekido Keiko) (90226647)	宝塚医療大学・和歌山保健医療学部・教授 (34536)	
研究分担者	香川 秀太 (Kagawa Shuuta) (90550567)	青山学院大学・社会情報学部・准教授 (32601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------